

しがだい

== 滋賀大学広報誌 ==

第17号 平成15年11月

特集 滋賀大と近江の文化

地域で活躍する学生たち

連載

今の研究を語る

滋賀大学の新しい動き

滋賀大学が全国に誇る研究施設の一つとして、経済学部附属史料館があることは、周知のことでしょう。歴史研究のために第一次史料を保管する施設としては、全国に所在する五千館を超える博物館や博物館相当施設のうち、美術館・水族館・動物園・自然系博物館を除いたほとんどがその役割を担っています。しかし、「史料館」という名称の施設で古文書を中心に史料収集を進め、それらを整理・公開するとともに、研究・教育に供している大学は、私の知る限りでは本学と学習院大学史料館だけなのです。他の大学においては、大学博物館や図書館が収集・整理を実施しているに過ぎず、日本の歴史や文化を後世に伝えていく上で、多くの問題を抱えているのが実情なのです。

「博物館」において収集・整理するのは「標本」とされており、「図書館」における文献・史料分類は「図書分類」が応用されています。そのことは、古文書が有する特質と大いに齟齬をきたす実態であり、価値判断を誤らせていると言わざるを得ません。

幸いなことに、本学が所在する滋賀県は、古文書の残存状況が全国的に見ても優れており、現在でも新たな史料が陸続と発掘されていることが情報として届いています。それらの史料を分析することにより、従来の通説が書き換えられる可能性が強くなってきています。このような状況の招来は、「平成の大合併」を迎えた自治体が、合併に先んじて地域の歴史をまとめようとする意識から、自治体史の編纂を開始し始めたことに、原因の一つがあります。地域の人々が、自らが居住し生活する土地の歴史を学ぶことになるのですから、自治体史を編纂すること自体は、とても大切なことだと思います。しかし、全く問題がないのかと言えば、そうではありません。重要なことは、自治体史編纂事業により発掘・収集された史料をどのように後世に伝えるか、ということについて明確な指針が乏しいことです。

博物館や相当施設をすでに設置し、そこに学芸員があり、収集史料を保管し整理・公開する体制をもった自治体なら、当面の史料散逸は防ぐことができるでしょう。しかし、自治体史編纂事業の終了とともに、収集されたものが役所の倉庫にしまい込まれたり破棄されるようなことになれば、歴史の追検証は不可能になります。史料は、それを読むひとの観点により多様な解釈が可能ですから、「事実」確認のためには第一次史料を後世に伝える必要があるのです。通説は、あくまでも現在における主流の解釈に過ぎないのです。それゆえ、発掘された古文書類は現用に供するとともに、次代の人々に残すべき価値を平等に持っていると言えるのです。

本学の史料館には、十三万点を優に超える古文書類が保管されています。史料館は主要には、「近江商人」研究と近江地域史研究に供するために史料を収集し、整理・公開してきました。斯学において、史料館が果たした役割は多大なものがあります。史料館に史料収集されて来た経緯は、史料館「研究紀要」二九号に掲載されている原田敏丸先生の講演録「史料館事業の回顧」をご覧くださいと思います。そのなかで原田先生は、「近江の場合は村の古文書が大字(区)の共有文書(区有文書)として残されている場合が多く、一個人の恣意によって処分できなかったことが、古文書残存率の高さの一因であると思われる」



滋賀銀行寄託諸帳簿

近江社会と

附属史料館

(経済学部教授)

と述べられ、そして、「近江における村落共同体の強固さとつながり」の存在を推測されています。私も同様の感想を抱いています。

近江国は、日本中世社会がもつとも高度に発達を遂げた社会組織、すなわち惣村を成立させました。それゆえに、近世を特質づける石高制社会の開始を告げる検地もまた、近江国から竿打ちされることになったのでしよう。惣村史料として「今堀日吉神社文書」、「菅浦文書」、「大嶋神社・奥津嶋神社文書」の重要文化財が史料館に寄託され、学術研究や多くの教科書・参考書に引用されていることは、特筆されるべきことです。

先述のごとく、滋賀県では多くの自治体史編纂事業が進められています。このような事業は過去にもあり、現在も進行中です。いずれの場合においても、史料館に保管されている史料が多く利用されています。それゆえ、保管施設のない自治体や個人に代わって、史料の寄託・寄贈を引受けることにより、県下の地域史を明らかにし、また、後世における追検証の機会に備えるという新たな社会的貢献を果たすため、史料館の役割は今後も重要なものがあると確信できます。

「近江商人」は、日本商業史研究において避けて通ることのできない商人類型です。滋賀県の自治体や商工団体においても、「近江商人」をキーワードにした町おこしや経済振興策が実施されていることは、巷間よく目にするところです。

しかし、「近江商人」をどのように概念規定するのかということですから、斯学の研究者において見解の相違があることは、存外無関心のように思われます。単純化すれば、見解は二つに分かれます。一つは、「近江商人」は近世商人であり、近世社会においてこそ優位性を持ち得た商人であり、近代社会では成立し得ない商人類型と考えるものです。他の一つは、「近江商人」は近世以来、連続と現在でも存在する商人類型だと理解するものです。私は前者の見解に属する者ですが、世間一般では後者で考えている人々が多いように思います。私から見れば「近江商人」とはどのような商人なのか「考えていない」とは思えませんが。

本学が「近江商人」研究で多大な成果を学界に提供してきたことは、よく知られた事実です。本学に在籍された斯学の先学の方々のご研究を見ても、「近江商人」としての主要な分析の筆を近世期の段階で留め、近代以降は経営史資料の分析により実態のみの記述を行うことで終始したのは、多分に私と同様な概念規定で「近江商人」を理解したものと考えています。ただ、そうすると近代・現代の商人・経営者をどうとらえるのか、ということに答えないと、巷の人々の安易な「近江商人」理解の問題を批判できません。そこで、私は「近江商人」「近江商人企業」「近江商人系企業（商家）」「近江系企業（商家）」「滋賀県系企業」といった経営体に区別して考えることが必要だと思っています。もっとも、この概念規定は分類し始めるとなかなか困難な問題があり、いまだ私案を思案中です。

ともあれ、「近江商人」の分析方法の成立には、江



「近江商人」研究の史資料

宇佐美英機

頭恒治先生の『近江商人 中井家の研究』が大きな役割を果たしました。そして、小倉榮一郎先生の多数の一般書が巷間のイメージの定着に大きな影響を与えました。「三方よし」という、歴史史料には存在しないものの、言い得て妙な造語までなされています。研究に携わる者としては、史料に即して「事実」を明らかにすることが大切ですから、まずは第一次史料である商家文書の分析が重要です。史料に書かれていないことまで書き込むのは小説家の仕事です。

本学史料館が収集する史料の対象の一つは、「近江商人」研究に寄与するものです。これまでに主に五個荘町・日野町・近江八幡地域の商家史料の寄託を受けています。第一次史料は特定の施設や個人で排他的に利用されるのであれば、研究としてはフェアではありませんし、客観的に事実を確認することは不可能ですから、誰もが利用できるよう整理・公開を進めています。また、近年は他府県に所在した出店の調査も実施し、蝦夷地交易に従事した商家の北海道に現存する史料もマイクロフィルムで収集するなど、本学に來れば全国伝存の関連史料を閲覧できるようにするべく調査を進めています。

江頭先生・小倉先生などがご利用になり、「近江商人」研究に多大な成果をもたらした「中井源左衛門家文書」は、本学に搬入されて以来、約半世紀ぶりによろやく本年春に整理・目録が完成し、全面公開

できるようになりました。約二万点の史料群の目録と史料館搬入後の経緯などは、『近世・近代商家文書に関する総合的研究』(平成二十二年四月度科学研究費補助金・基盤研究B2・研究成果報告書 代表・筆者)をご覧ください。

「近江商人」は、「近江国」固有の歴史・文化を明らかにする上でも、重要な研究対象であることは疑いを入れません。本学における「近江商人」研究は、これまで「近江国内」に伝来した史料を中心に、経営史・経済史の観点から分析が行われてきました。今後そのような分析の事例研究を積み上げることが大切ですが、さらに史料的には他府県所在のものも発掘し、他国から見た「近江商人」像も解明する必要があります。また、経営史・経済史の観点だけでなく学際的な視角を導入した分析が必要でしょう。そのことにより、新しい「近江商人」の知見が加わることになり、通説の見直しも進むものと考えています。私が近年進めている、近江国における「出世証文」の分析や「立身・出世」観の検討は、新しい「近江商人」像を描き出すことにつながるものと確信しているところです。

史料が豊富に残されている近江国は、歴史研究者にとつて魅力溢れる地域であり、通説の書き換えと学際的研究を試みる条件が整った地域だと言えます。



『近世・近代商家文書に関する総合的研究』

経済学部附属史料館では滋賀県下の古文書・民俗資料を豊富に収蔵しており、なかでも中井源左衛門家文書をはじめとする近江商人関係史料や、国の重要文化財に指定されている中世三文書がとくに有名です。

しかし附属史料館では、このほかにも実にさまざまな種類の古文書・民俗資料を収蔵しています。そして、これら史資料一点一点が、近江国そして滋賀県がいかに豊かな歴史と多彩な文化を育んできたかを雄弁に物語る貴重な文化財なのです。

附属史料館ではこれら史資料について調査・研究を進めています。同時に学内外に向けての幅広い公開に努めています。たとえば附属史料館の二階閲覧室では、『収蔵史料目録』やカードを検索することによって、誰でも史料を実際に手にとって閲覧することができます。また一階展示室では収蔵史資料を用いて、年に二回（春・秋）開催する企画展や、常時見学が可能な常設展を行っています。

附属史料館には専門の歴史学研究者から、地域の歴史に興味を持ち、自主的にこれを学びたいと考える一般市民まで、毎年数多くの人々が訪れます。滋賀大学環境フォーラム編『滋賀大学で環境を学ぶ』にならうならば、誰でも「附属史料館で近江の文化を学ぶ」ことができると言えるでしょう。

ここでは、附属史料館の豊富な収蔵史資料のうち、個性ある史料群をいくつか紹介することにします。

【大浜家文書】大浜家文書は、東浅井郡びわ町大浜の大浜太郎兵衛家に伝わった文書です。大浜家は、江戸時代にこの地域を治めていた大和郡山藩から大庄屋（おおじょうや）に任じられていました。

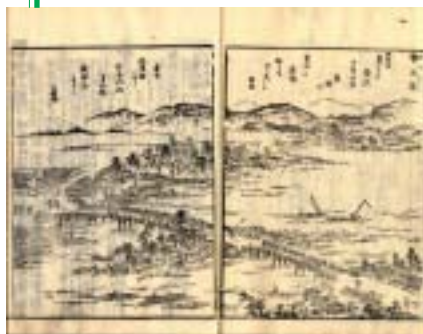
江戸時代にはそれぞれの村ごとに庄屋や名主など村役人が置かれていたのですが、大庄屋とはそれら村役人を統括して何ヶ村にもわたる広い範囲での支配を行う役職で、領主から苗字帯刀を許されていました。

大庄屋である大浜家のもとには、江戸時代を通じて法令・租税・戸口調査・訴訟ほかさまざまな地域支配に関わる文書が多数蓄積されました。大浜家の約七、三〇〇点の文書は、一括して附属史料館に寄託されています。

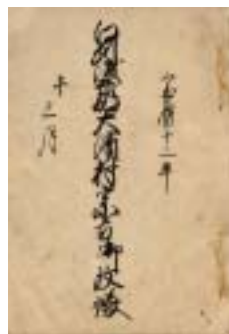
【真崎文庫】真崎文庫は、近江八幡の真崎重右衛門氏が収集した史資料です。真崎氏は『滋賀県八幡町

附属史料館で近江の文化を学ぶ

青柳 周一（経済学部附属史料館助教授）



「近江名所図会」(真崎文庫)



「宗旨御改帳」(大浜家文書)

史(一九四〇年刊行)の母胎となった月刊の歴史新聞『大湖』の同人であり、近江の歴史を深く研究し、その成果を世に伝えた人物です。

真崎文庫の中には西川伝右衛門家文書など有名な近江商人関係史料をはじめ、幕末に国学を学び政治活動に奔走した西川吉輔家文書や、八幡の為心町上共有文書や小幡町中共有文書といった町方史料など、多種多様な史料が含まれています(真崎家自身

も江戸時代には領主である朽木家のもとで代官を勤めた家柄で、同家の文書も真崎文庫の中にあります)。これら史料は、真崎氏からまとめて史料館に寄託されました。真崎文庫は地域の歴史を語る上で不可欠な史料群であり、我々は責任を持って守り伝えてゆく必要があります。

【北村源十郎家文書】江戸時代、米原湊は琵琶湖舟運の拠点のひとつとして栄えており、彦根藩の領内の重要な湊として松原湊・長浜湊とともに、「彦根三湊」と称されていました。

この北村源十郎家は、米原で本陣(大名や公家などが宿泊した旅館)を営んでいた家です。しかし同時に、北村家は米原湊の船問屋でもあり、数艘の船を持つ船主でもありました。米原湊は現在のJR米原駅付近に位置していましたが、現在そのおもかげを窺うことは困難です。北村家文書は江戸時代の米原湊の歴史を伝える唯一の史料群として、きわめて高い価値を持つものと言えるでしょう。

【絵図資料】史料館にはいわゆる文字だけが書かれた古文書のほかに、多くの絵図資料が収蔵されています。一口に絵図と言っても、江戸時代の近江国や日本各地の地図、中山道など街道筋や宿場の町並みを描いた絵図、村どうしの境界争いの際に作成された現地の地形図、また江戸時代から明治・大正にかけて商人が宣伝用に作成した絵ピラ・引札など多岐にのびります。

これら絵図は、江戸時代の村や町の景観を復元したり、琵琶湖や里山など自然環境の変化を研究する上でもきわめて大きな手がかりとなるなど、文献史料だけでは知り得ない情報を我々に伝えてくれます。史料館ではこれら絵図資料についてデータベース化する構想を持っており、現在作業を進めている最中です。

私は、この夏休み、愛知郡愛知川町で行われた水利・地名調査の合宿に参加しました。それは、村内の字毎に田への灌漑がどこからどのように行われているか、そして小字など細かな地名がどのように残されているかの調査でした。

調査の方法はおよそ次のようなものです。圃場整備前の地図を用意し、明治時代の地籍図といわれる地図などから知られる水路や小地名を書きこむ。現在の地図と比べながら現地を概観する。圃場

整備前の状況を知る現地のお年寄りたちや区長さんたちに約束を取り付けた後に、で準備した地図を持参しながら、用水や水がかり、田畑の水はけや土質の確認、「小字や俗称地名の確認」と伝承などの聞き取り、「農業や神社祭祀に関わる慣行や組織などの聞き取り」などを行う。

そして、その結果を地図に反映させた上で文章化するのです。文字で書けば、簡単なのですが、そう簡単には行きません。まず、段階の地図の準備にしても、小地名やその境界が記された地図毎に違っているということも生じます。また、道も現在の道と異なっていることもあります。このようなことは、後から考えてみると、段階での聞き取りのきつかけが出来たと喜ぶべきものなのですが、最初の段階ではもう戸惑うばかりで先に進めないということになってしまいます。

一番大変なのが、の聞き取りです。仕事はまず、お年寄りたちから約束を取り付けるところから始まります。そして、お宅にお邪魔するなり、こちらの調査本部である旧愛知郡役所に来ていただいで話を



撮影：愛知川町教育委員会 福持昌之さん

伺います。中には気難しい方もいらっしゃるのですが、話に応じて頂ける方の多くは、気さくに応じてくださいました。でも、愛知川町の場合、圃場整備が昭和四〇年代に済んでいるため、その記憶を思い起こして頂かねばなりません。こちらが聞きたい水利や地名のところがすぐには出て来ませんから、うまく話を持っていくかというのが調査者の腕の見せどころになります。何人かの方が同時に話しはじめたりして書き取りが大変なこともあります。手分けして話されたこと

をカードに、そして地図に書き込んでいくのです。中には、聞き取りがうまくいかずがっかりして帰って来た班もあつたりしましたが、「ご苦労さま」とスイカを下さつた方もいたり、地区の盆踊りにさそわれ近州音頭を踊つた班もあつたりで、これこそ地域の人達との触れ合いといえるでしょう。しかし、この後の聞き取りをまとめる作業といつたら、どんなに時間がかかることが。清書の地図が一ヶ月以上たつても提出されていないという状況を聞けば想像がつかかも知れません。

地域調査の必要性

愛知川町の水利・地名調査に参加して

宇佐見隆之（教育学部助教授）

ところで、なぜこのような調査が必要なのでしょう。日本の景観を形作る一つである水田や畑、これらの景観は、牛馬耕の始まる平安末から続いているといわれています。しかし、機械化農業に向けて区画を大きく転換する土地改良事業としての圃場整備が国の方針として全国的に続いています。つまり、昭和という時期は工業化とともに、八〇年以上続く農村の景観も一新してしまう時期であったのです。有形の文化財としての建築や絵画などは残ります。しかし、景観は保存されません。そのような状況の中で、発掘調査で記録される地下の遺物などと同様に、景観やそれを示す旧地名を記録して残そうというのがこのような調査なのですが余り進んではいません。しかし、圃場整備が進み、それ以前の記憶を持った方が高齢になっている現在、調査の時間も余りありません。けれどもこのような調査は、今回の愛知川町のような地方史編纂の過程を除くと、一部の大学やグループの研究活動の一環として行われているに過ぎず、多くの景観は保存されることなく失われているのです。今回の愛知川町の調査を行ったのは、関西・関東の日本史や民俗学を専攻する大学院生、学部生の皆さんでした。特に、交通費も支給されないのにやって来られる関東の方々には頭が下がります。ただ残念なのは、滋賀県内の調査にかかわらず、集中講義などの影響で滋賀大の学生の姿が全くなかったことです。今後このような調査の機会があれば是非参加してほしいと思います。それこそが机上でない、参加できる地域連携の姿だと思います。このような調査については、石井進ほか編『中世のムラ』（東京大学出版会、一九九五年）、服部英雄『地名のたのしみ 歩き、み、ふれる歴史学』（角川ソフィア文庫、二〇〇三年）などを参考にしてください。

なお、明治初期の地籍図と呼ばれる地図は、滋賀県が全国でもっとも残されている地域です。滋賀大にも少しですが、現物や写真が保存されています。

文化とは人々が長い年月をかけて土地を「cultivate」し、衣食住の生活風土として形成してきたものであるとするならば、その根源は伝統的慣習が根強く生きる農村社会に見出せるはずである。そんな思いを抱いて僕は、今から十年ほど前近江八幡の浅小井という集落に住み、村民一年生として寄合にも出席し、村祭りにも松明作りから参加して約一年半を過ごした。そこで見出したものは、丸山真男が「個の析出を許さず」と言ったような共同体規制が個を飲み込んでしまう社会でもなく、また逆に個が突出して孤立し共同性を



近江文化私観

筒井 正夫（経済学部教授）

ている。東北地方の農村のように、広大な土地に個々の農家が散居しているのではない。それはまるで「街」といつてもいいほど、一つ一つの家々が「密集して」暮らしている。したがって、何世代にもわたって顔と顔を突き合わせながら、「個」と「個」が主張しあいつつ、仲良く暮らしていかなばならない。しかし、否が応でも「個」が共同し合わねば、生きていけない仕組みになっている。それは、この地が古代から開け、耕地のほとんどが水田として開発されてきたことに由来する。上流

喪失してしまつたような社会でもなかった。そこでは、村人たちの「個」としての活発な存在と同時に、「ムラ社会」共同体としての村落の強さが共存していたのである。近畿は古くから麻・綿・絹などを用いた様々な物産を生産し商品流通も発展し、「個」の成長は早く、経済的感覚にもけつして疎くない。現在でも実に盛んな祭や町づくりにも村民たちは活発に発言し積極的な関わりをもって活動している。そしてそうした強い「個」が、琵琶湖と周囲の山々に囲まれた比較的狭い耕地に集住して村落を形成し

の者が使つた水を自分達ももらい、それをまた下流の人々に利用してもらう。水の管理と運用を通じて個々の農家は否応無く協力を余儀なくされる。しかも近江の川は、琵琶湖と周辺山系に挟まれて短いため流量が少なく、ために旱害に頻繁に見舞われるが、一旦大雨が降ると琵琶湖の水と天井川が容易に氾濫して大洪水をもたらす。日照りの時は、同じ水系の農民たちは、一つの命綱にしがみついているように固結し、限られた水源を巡って隣り合う水系の農民と、血で血を洗うのつびきならない騒動をも引き起こす。しかし、

洪水後の水利復旧時にはまた争つた相手とも共同していかなばならない。この「水」という人力では如何ともなしがたい自然力を前にして、強い「個」はどのようにして人と人との「和」を、そして人と自然との「和」を形成していくことができたのであるうか。

その一つは祭の存在である。農作業の合間合間に自然への恐れと感謝の気持ちをささげ、五穀豊穡や家の永続を願う行事は、同時に、村民一人一人がさまざまな役を負わされて融和を図り、遊興に興じ、時には水争いの村落



間の融和さえ図る工夫がなされていた。

その祭の根底を支えている精神風土は、自然信仰と祖先信仰が合体した土着の産土信仰と、人間の個としての悩み・苦しみからの解放を諭す仏教とが、長い年月をかけて、互いを認め合いながら融合した本地垂迹の宗教的風土である。近江の村落には必ず複数の神社と仏閣が存在し、共存している。

さらに、こうした宗教風土、精神風土を衣食住の総合文化にまで高めたのが茶道である。近江の地に今も脈々と受継がれる茶道が、戦国時代という、

生産力が飛躍的に発展して自然との調和を崩し、さらに人間が階層間、村落間、領国間の絶え間ない戦闘状態におかれた時代に生み出されたことに深く注意する必要がある。それは、己を捨てて他を活かしあうことで、「個」と「個」の調和を図り、さらに四季の自然を生活全般に取り入れて自然と個との交流を促す。そして様々な器物を日常生活の中で心を込めて用いることを通じて、人と物との間にも心の通い合いをもたらす。しかも、それは「知」が先にあつて頭から覚えるのではなく、「行」を通じて身につけ、普段の生活

や立居振舞の中に、自然・美・和をもたらす独特な文化体系である。これは、戦国時代の教訓からいかにして狭い郷土で、個人がお互いを認め合いつつ、自然を愛でて美しく平和に暮らすことができるかを模索した結果編み出された知恵の結晶であると、僕には思われてしかたがない。

戦後日本がほぼ一貫して捨て去ろうとしてきた、こうした我々祖先たちの貴重な知恵を今一度真摯に省みる必要があるのではなからうか。



写真：「滋賀の祭り」と伝統行事 100選」

滋賀県では古くからいろいろな野菜や特用作物が栽培され、地域独特の野菜や製品ができており、その地域の文化を形成してきたとともに、都であった京都の衣食住材料の供給地としての役割を担ってきた。カブラ、ダイコン、食用キク、コメ、カンピョウ、コンニャクなどが滋賀県の食用作物であり、オボウシバナ、イグサ、アイ、妙蓮などが特用作物の代表といえる。カブラの栽培は全国各地で栽培されているが、滋賀県下においても、それぞれの

根から葉柄まで赤い湖西マキノ町の蛭口カブラ、根だけが赤い今津町の万木カブラ、大津市の白い近江カブラ、守山市中主の白い中主カブラ、矢島の赤い矢島カブラ、日野町の日野菜カブラ、愛知郡の信州カブラ、彦根市大藪の紫根の大藪カブラ、小泉の葉柄まで赤い小泉カブラ、入江の入江カブラ、磯の赤カブラ、木之本町の天狗カブラである。これらは根の方にも特徴があり、蛭口、万木、矢島、信州、大藪、磯、天狗は丸い根をしているが、近江は極端な扁平形、日野菜

現在食用キクと云えば、関西以西では刺身のツマとしての利用が殆どであるが、東北地方ではキクの花弁を食用にする習慣が一般的であり、「阿房宮」、「延命菜」等を中心に数多くの食用キクの品種が青森県、山形県、新潟県を中心に栽培されている。しかし京都など関西においても精進料理では、キクの花弁を利用しており、滋賀県坂本地区では古くから花弁の食用が日常的に行われている。

三種のキクが載っている他、江戸時代の書物にはたびたび記載されている。俳人松尾芭蕉の近江堅田での俳句に「蝶も来て酔をすう菊のなますかな」等があり、滋賀県での栽培利用の一端がここにも窺える。



平弁坂本キク

における野菜栽培の

歴史と人々の生活

木島 温夫（教育学部教授）



近江カブラ



管弁坂本キク

地域独特の形質を持ったカブラが成立し、その地域の食文化を作ってきた。滋賀県には特に多くの種類のカブラが栽培されてきたが、それは一つに、カブラは砂質土壌でよく生育するため、琵琶湖周辺や流域河川付近での砂質土壌がカブラの栽培に適していたことがある。またカブラの中国から日本への伝播経路で、滋賀県が南からの経路と北からの経路がぶつかる場所に位置していたこともカブラの種類の多い理由と思われる。滋賀県には十品種以上の地域独自のカブラがある。カブラの

は細い大根形、小泉、入江は短い大根形である。これら独自のカブラがそれぞれの地域の漬物になり、また中主カブラは京都の千枚漬などの材料ともなってきた。しかし多くのカブラは栽培されなくなり、現在も一般的に栽培されているのは、日野菜カブラ、万木カブラのみである。湖東の湖畔での赤カブラの佃乾しは地域の季節的風物詩になってきたものである。近江カブラはほとんど栽培が見られなくなったが、大津にある漬物店の「長等漬」の材料として契約栽培としてわずかに栽培されている程度である。

良時代から平安時代の初期に薬草として伝えられたと考えられている。その後鑑賞用にもキクは度々導入されるが、当時から薬食用の甘いキクと、鑑賞用の苦いキクとに分化していた。平安時代の延喜式には近江国から薬として黄菊花一欵二両が献上されたことあることから、この時代には近江のどこかで甘キクが栽培されていたと考えられる。以後薬食用キクは文献的にはほとんど登場してこないが、戦国時代末から江戸時代初期に作られたと考えられる農業書「親民鑑月集」に食用菊とし

あえもの等にして秋から冬にかけて食利用しているが、坂本では平弁のキクを本来の坂本キクとして好まれている。また湖西の真野大野にある如意寺では、十二月の月例会にはキクの料理（ユズをかけて食べる。）を持ち寄って食べる習慣があるが、ここでは遅咲きの平弁のキクが好まれて栽培されている。江戸時代の岩崎灌園が表した「本草図譜」には、現在栽培されている平弁キクと管弁キクと思われるものの他に、ポンポン咲きとは違ったもう一種が描かれている。

美術研究室の学生 国際展に参加
新潟から世界へ発信!



梅雨明けが遅れたこの夏、新潟県の越後妻有の十日町市を中心とした六市町村で開催された「大地の芸術祭、越後妻有トリエンナーレ」に本学教育学部の美術教育コースの有志が参加し、大学を飛び出し、生のアートを体験した。

同展は、東京でも大阪でもない一地方から、日本のみならず全世界に向けて発信する、アートの新しい形を模索するもので、国内外の著名な現代美術の作家を中心に、地元の人たちとアートボランティアによって組織・運営された。

第二回ということで三年前の初回の反省と二十一世紀への提案を加味し、アートの裾野である美術教育を考えるべく、全国の国立教育系大学の美術科に参加が呼びかけられた。同展への参加を表明したのは琉球大学をはじめ鳴門教育大学、大阪教育大学、地元上越教育大学など数十校、二十ゼミに登った。



地方から世界に向けて発信

作品タイトルは「お祝い隊」

エントリーを表明したものの、物理的距離から、現地の情報も乏しく「雪がすごい。かつては陸の孤島だった。」という程度で、皆がそのイメージを共有するには至らず、活動プランを決定するのに一月余りを要した。時間をかけて討論を繰り返して、その末に生まれたのが、「お祝い隊」と名付けたフィールドワークであった。

とかく忘れてしまいがちな日常の、ちょっとしたお祝い事に、宮沢賢治の『雨ニモマケズ』の一節ではないが、東へ西へ、ある時はお爺ちゃんのお祝いに、またある時は開店記念のお祝いに、私達にできる範囲の、ささやかなアートを持ち込み、お祝いさせていただく。おめでたい気分を分けてもらい、楽しさをお返りする。

そして、そこで起こるアートを媒介としたコミュニケーションを、様々な形で記録展示する。それが「滋賀大・お祝い隊」の全容である。

「祝」の一文字を背に街を練り歩く

六月初旬、人気の少ない町中を練り歩く白装束の一行。背中に赤と黄色の水引に「祝」の文字。「お祝い隊」のユニフォーム姿の美研の学生である。生協で売られている白衣を元に、授業で覚えたシルクスクリーンの技法で、お祝いの場にふさわしいとの考えで、のし袋をイメージし制作された。

当初は、奇異に映るそのいでたちから巡回の駐在さんにじろりと見られた事もあったが、回を重ねて少しずつ地元の皆さんにも知ってもらったことが、着る側の学生にも「お祝い隊」の七つ道具とし

て欠かせないものになっていった。白衣を身にまとってことで気分を「晴れ」に切り替え、いざお祝いに!



「祝」の字を背に、街を練り歩く滋賀大美術研究室の面々

毎週末、お祝い隊は行く

六月から七月の毎週末、大津を朝に出発し、六時間かけて新潟松代町に。都合のつく学生が入れ代わり立ち代わり、計十七件のお祝いに駆けつけた。

お祝させてもらった人は、三才から米寿の八十八まで。様々な年齢の誕生祝いから、結婚や初泊まりの結婚関連のお祝い事、就職祝いもあれば退職祝い、お店の開店記念に句碑建立、母娘初旅行のお祝いや、名画に感動した記念なんてもあった。

各々のお宅では、ちょっとした小道具などを使いお祝いの雰囲気を作り、似顔絵を描かせてもらった。話し上手な訳でもないのだが、絵を描きながらだとなぜか会話もスムーズで、仕事の苦労話や戦死された旦那さんの思い出話、親も知らない結婚までの工

地域で活躍する学生たち



ピソードから、しびれない正座の仕方など、色々な話を聞かせてもらうことができた。出来上がった似顔絵に、「これは私が孫を見ている顔」だとか、「いろんな顔があるけど、どれも自分だねえ」といった声を聞く事ができた。あるおばあちゃんは、「あなたも描いてもらいなよ」とお友達を紹介してくれたり、またあるお宅ではお礼にと、すごい御馳走をいただき、お祝い隊がおよばれ隊に、といった一幕もあった。

かつての酒屋がお祝いの空間に



「フナ鯨通信」
活動の記録を新聞にして回覧板にて松代町のご家庭にお届け

お祝い隊の活動の全容を、似顔絵、写真、ビデオ、交わされた会話で賑やかに展示。新潟行きの合間を縫って、分担して制作されたものである。そこはかつて酒屋さんだった空間で、この町のお祝いの中心であった場所である。

ピンクを基調とした壁から、巨大な水引のオブジェから、全てが手作りで、訪れた人たちにもお祝いの楽しい雰囲気が伝わったようである。中には展示会場でのお祝い隊出張依頼もあった。

お祝い隊活動始末記

惜しまれつつも展示会が九月初旬で終わり、搬出作業の後、描かせていただいた似顔絵とお祝い隊の記録ビデオを持って、お礼を兼ねて各お宅にお届けし、今回の滋賀大お祝い隊の活動が完了した。

数カ月におよぶ活動の中で、学生が感じた事は多かったように思う。似顔絵を描く事と、自身の作品を作る事は違う部分も多い。が、アートが本来持つコミュニケーションの力を確認できたのではないか。そして、関わった多くの人に、少なからず問題提起はできたように感じた。

(藤田 昌宏 教育学部講師)



再帰的効用及びジャンプ拡散情報の下での
資産価格の研究楠田 浩二
(経済学部助教授)

私達は日常の経済活動において様々なリスクに直面しています。例えば、家計の立場からは自動車事故に伴う損害賠償の支払い(自動車事故リスク)や疾病・障害に伴う治療費の支払い(疾病・障害リスク)等が、企業の立場からは保有株式の価格下落に伴う資産価値減少(株価変動リスク)や保有債権・負債の金利変動に伴う純資産価値減少(金利変動リスク)等が挙げられます。各経済主体がこうした様々なリスクを制御しつつ最適な取引を行えるように市場では様々な証券が取引されています。自動車事故リスクに対しては自動車保険、疾病・障害リスクに対しては医療保険、株価変動リスクに対しては最も頻繁に取引されている派生証券であるヨーロッパ・オプション等の株価派生証券、金利変動リスクに対しては金利のヨーロッパ・オプションであるキャップス等の金利派生証券といった具合です。これら証券の真の価値を全ての市場参加者が利用し得るようなかた

明らかにすることが、私の専攻分野の一つである資産価格理論の使命の一つです。とりわけ「株式、債券等のリスクの有る証券の期待収益率は銀行預金のようなりスクの無い証券の収益率と比較して(有リスク証券の期待収益率と無リスク証券の収益率の差はリスク・プレミアムと呼ばれます)、如何に評価されるのか?」と、「ヨーロッパ・オプション、先物オプション等の派生証券は如何に評価されるのか?」という二つの問題に対し、これまで多くの研究者の膨大なエネルギーが費やされてきました。

これら二つの問題に答えるために、本研究では、各経済主体は市場の大きさに比較して十分に小さく、このため各経済主体の行動は市場の諸価格に影響を与えない、取引費用が存在しない、市場における任意のリスクをゼロにするための諸証券の売買方法が存在するなどの標準的な諸仮定が成立している一般均衡完備証券市場モデルを想定しています。このとき、前述の二問題に対する回答は各消費者の効用と財・各証券の価格が従う確率過程の如何により決定されます。初期の従来研究では、各消費者の効用に関しては各時点の消費から得られる時点効用を時間的に足し合わせたかたちの「時間加法効用」が、財・各証券価格の確率過程に関しては「拡散過程」と呼ばれる連続的に変化する確率過程が、それぞれ仮定されてきました。このとき、財・各証券の需給均衡を齎す一般均衡解の存在が示された上で、各証券の期待収益率は、リスク・プレミアムが代表的個人(相対的)危険回避度、同証券価格と総消費の共分散にそれぞれ比例することを示すブリーデン型の消費に基づく資本資産評価モデルで表され、ヨーロッパ・オプションの価格は、例えば原証券の価格が拡散過程の一つである幾何ブラウン運動の場合、有名なブラック・ショールズ公式で表されます。しかし、多くの実証分析の結果、時間加法効用、拡散情報の各仮定は何れも適切ではないことが示唆され、各消費者の効用に関しては時間加法効用を一般

化した「再帰的効用」が、財・各証券価格の確率過程に関しては希少事件の発生等に伴う急激な価格変化を表現するジャンプ過程を付加して拡散過程を一般化した「ジャンプ拡散過程」が、それぞれ有力な代替仮説として提案されています。こうした中、再帰的効用、ジャンプ拡散情報の何れか一方を仮定した上で、一般均衡解の存在、消費に基づく資本資産評価モデル、派生証券評価モデルの何れかを示す研究が行われてきました。

本研究の具体的な目的は、再帰的効用及びジャンプ拡散情報の両仮定の下、一般均衡解の存在を示すことによりモデルに理論的正当性を付与した後、同モデルの枠組みの下で、消費に基づく資本資産評価モデル及び派生証券評価モデルを実証分析の可能なかたちで導出することです。有力な再帰的効用の一つである確率微分効用とジャンプ拡散情報の下では既に同目的を達成しており、現在、もう一つの有力な再帰的効用である習慣形成効用とジャンプ拡散情報の下での資産価格研究に着手したところです。

残念ながら、本研究では、解析的な取り扱い易さを確保するために現実的とは言い難い仮定が幾つか置かれています。その一つは、各消費者は将来の不確実性のある一つの確率過程モデルとして捉え、これに全面的に依拠して効用を最大化している」という仮定です。最近になって、ハンセン・サージエント等が「各消費者は将来の不確実性のある一つの確率過程モデルとして捉えつつも、これに全面的に信を置くことができず、このためこの想定モデルが誤差を含んでいることを考慮した上で効用を最大化している」として構築した「想定モデルの誤差を考慮した効用」は、より現実的であり、かつ解析的な取り扱い易さが損なわれていないことから有望視されています。今後は、こうした想定モデルの誤差を考慮した効用を本研究に導入することを企図しています。

文法論における引用構造研究の意義



藤田 保幸
(教育学部教授)

私の専門領域は、現代日本語の文法論であり、一貫して取り組んできたのは、日本語の引用構造の問題。「〜ト思ウ」「〜ト言ウ」のように、ことばを引用句「〜ト」の形で文に組み込む構造の表現についてである。実は、この「〜ト」という文の構成成分（以下「成分」という）は、なかなか一筋縄では行かない厄介な性格をもっている。

今日のような問題意識や方法論に基づく文法研究が盛んになって来たのは、ここ三十年ほどのことであるが、その間一貫して力をもってきたのが、「述語中心主義」とでもいうべき見方である。例えば、「大田氏がゆっくり教科書を読んだ」のような文について、昔ながらの文法の説明では、「ゆっくり」も「教科書」も述語に係る連用修飾語だとされた。が、この両者は、よく観察するといささか働きが違っているようで、もし「大田氏が教科書を読んだ」のように「ゆっくり」を削っても文は不

自然にはならないが、「大田氏がゆっくり読んだ」のように「教科書」をはずしてしまつと、特別な文脈なしには理解出来ない不自然な表現になってしまう。つまり、「教科書」のような成分は、この文においてなくてはならない「必須成分」だが、「ゆっくり」のような成分は、なくても一応文が成り立つ「任意成分」なのである。そして、このことは、述語の意味から決まってくるのである。つまり「読む」の表す「読む」行為が成り立つためには、少なくとも「読む」主体と「読む」対象がなければならぬ。それ故、「読む」行為を表す動詞「読む」を述語として十全な表現を作るためには、対象を表す「〜ヲ」(と)と主体を表す「〜ガ」がなくてはならない。しかし、「ゆっくり」のような副詞は、文の表現内容を詳しくするものであつても、述語の意味からなくてはならない成分だということにはならない。このように、述語に係ってくる成分を述語の意味から「必須成分」「任意成分」に仕分けして、それによって文構造の骨格を説明しようとするのが、今日の文法のパラダイムというべき考え方だと言つてよい。

そうした考え方に立つと、「章が『さようなら』と言つた」のような文における引用句「〜ト」の位置付けも一見容易に説明出来るように見える。すなわち、述語動詞「言つ」の表す「言つ」という行為の成立には、「言つ」内容が必須だから、「〜ト」は「言つ」内容を示す必須成分だとすればよいように思われる。ところが、「〜ト」は、「章が『さようなら』と立ち上がった」のような構造を作ることでも出来て、この場合「〜ト」が述語の行為に対して必須の事項を差し出すものとはとても考えられない。このように「〜ト」というのは、同じく引用されたことばを示すものでありながら、必須成分のようになつたりそうでないようになつたりして、どうにも捉えどころのない成分なのである。また、右の例は

『「さようなら」と言つた』の述語「言つて」等の省略なのだと言明したくなるが、日本語において文の要である述語が省略されるなどということは、このような部分では通常起こらない。従来のパラダイムで片付かないこうした厄介さもあつて、日本語の引用構造の研究は著しく立ち遅れてきた。私がこの二十年ほど取り組んできたのは、引用されたことばの表現性が通常のことばと違うことを論証し、そこからいろいろの問題を統一的に説明出来る理論体系を構築することであつた。

研究という営みが、何らかのパラダイムにしたがつて進められることは大切なことである。しかし、学術研究が柔軟で実り豊かなものとして進んで行くためには、常にそれまでのパラダイムを相対化し見直して行く必要があるかと思う。その意味では、私の仕事も、現代の文法研究に対してなにかの意義をもつものかとひそかに自負している次第である。



二〇〇三年八月二日より二十一日まで、陵水学術後援会より研究助成をいただきまして、米国ワシントン州のワシントン大学ビジネススクールに出張してまいりました。研究助成に採択していただき、また不在中業務のご担当を快く引き受けてくださった諸先生方に深く感謝いたします。ありがとうございます。

小職は、二〇〇一年四月より二〇〇三年三月まで在外研究の機会に預かりましたが、今回もその研究の一部であります。ワシントン大学ビジネススクールはシアトルにあります。沢山の湖と丘のある風光明媚な街です。今回は、小職が現在すすめている「アメリカ小売業の発展の実証的理論的研究」のプロセスで共同研究者の一人である、マイケル・ソン教授と議論をするためでした。小職の専門はマーケティング論ですが、わが国の学会では日本オリジナル理論への圧力やデータ入手の難しさもあって、アメリカ企業の研究をするものは稀です。今は具体的に世界最大の小売業ウォルマートの戦略史を研究しています（なお、今回の出張の成果は、彦根論叢三四四号に掲載の予定です）。今回の出張で改めて痛感した経験をもって、海外出張報告にかえさせていた。だこうと思えます。

シアトルは今日メジャーリーグベースボールのマリナーズにイチロー、佐々木、長谷川という日本人プレイヤーがいます。もちろん、それだけではないでしょう。マイクロソフトやボーイング、シアトルにゆかりのある有名会社は他にもあります。日本でも大量の出店をこなす Starbucks Corporation



スターバックス1号店

なんで世界に 広がったのか スターバックス1号店

竹村 正明
(経済学部助教授)

(以下スターバックスとします)もそうです。シアトル市内では、石を投げればスターバックスというくらい多くのカフェを見つめます。マーケティング学者という職業柄、休日その一号店に足をのびしました。The Place of Mission というショッピングセンターの一角にそれはありました。

最初そのカフェを見たとき、正直な感想は「これが？」という驚きでした。その驚きには二つの内容があります。ひとつは、今のマークと違うことです。スターバックスのマークは人魚のデザインですが、今の上半身しか描かれていないのでそれが人魚かどうかわかりません。一号店のマークはしっかりと人魚が描かれていました。むしろそれよりも驚きは、この一号店から全米はおろか、全世界にカフェを展開しようなどと考えたことについてでした。というのは、それは、それはそれは小さなカフェだったからです。店の中にはテーブルさえもないのです。店の前にもテーブルはありませんでした。要するに、日本にあるどのスターバックスとも似ても似つかぬカフェ、と呼ぶべきかどうか悩んでしまうようなカフェだったのです。

スターバックスの一号店は一九七一年にその場所に出店しました。実際のところ、その世界戦略は、Howard Schultz という稀代の戦略家によるところが多くの本で語られますし、そのあまりに目覚ましい成長はそれに着手した一九九五年以降のことです。しかし、実際一号店を見たならば、二十年后であるうが世界中に出店する計画を立てよというのはおろか、想像せよということすら無謀だと思えるほどです。たとえていうならば、大阪梅田地下の立

ち飲み屋が世界中に出店し、しかも、その地の多くの人々が焼き鳥と生ビールを食べて飲んでいる様を想像するよくなものです。

この野望というか野心というかは、実に近代的だと思えました。その背後はもの本で読むしかないのですが、つまるところ合理性に対する揺るぎない信頼感です。ひとつはマネジメントの合理性です。コンセプトがよくて、普遍的とはいいたくないのですが、オペレーションを標準化できれば、それは国境を越えて移転可能であるということ。もうひとつは行動様式の合理性です。製品にもそういうことは多少ありますがサービスの消費とはわれわれの生活様式そのものにより強く関連します。スターバックスの輸出したものは、コーヒーをたしなむという様式です。その提供するコーヒーは、タバコの煙もくもくの喫茶店のそれとはまったく違うものなのです。スターバックスはコーヒーに対する行動様式を世界中で収斂させ、行動の予測可能性を飛躍的に高めたのです。つくづくアメリカは合理性の国だ、これが再び確認したことでした。

理論的な話はそれくらいにして、アイストラテを飲みながら西の方を眺めれば、水上に浮かぶ遊覧船にパラグライダー。Schultz もこの太平洋を眺めて世界に思いを馳せたのかと、少々、城山三郎(でも清水一行でもいいのですが)の世界に浸りました。帰り道、手元の地図を見て赤面。それは太平洋ではなく、Eion Bay だったのです。太平洋はまだまだずっと西の方。ここでも再び、アメリカは広いことを痛感しました。汗顔の至りです。

My study and life in Shiga University

Anupam Saha (Bangladesh)

Senior Student, Graduate School of Economics



It dates back to almost three years I came to Shiga University as research student, which was my first visit to Japan. When I reached Kansai International Airport and was waiting for my supervisor, somebody with a tall figure and a smiling face came to me and asked with a cool voice, "Are you Mr. Saha?" I looked at him with flurry of excitement; he was none but my supervisor. He came to take me from the airport though he was awfully busy with his research work. His cordial welcome helped me create an image the concept of supervisor in Japanese University.

Actually that was my first expression on Japanese and for the first time I came close to a Japanese man. With my professor I reached International House of Shiga University, a newly built dormitory for international students. The staff, spoiling her holiday came and was waiting for us to hand over the room's key, extended her welcome in such an amiable way that I was lavishly impressed and could easily guess the teacher-student and student-staff relationships in this University.

The University is located in Hikone, a countryside, abundant with green and natural beauty, is historically a famous place. The position of Shiga University is just by the side of the Lake, Biwako, which is the biggest lake in Japan. Those who like nature, green and those who like peace, this is the ample place to study and research in.

The university is equipped with almost all the necessary facilities. We have access to all necessary journals, books and articles. While studying in Shiga University, professors as well as the staffs provided me with all sorts of assistance, which made my student life in this university easy and smooth. I belonged to Graduate School of Economics. Professors from famous universities around the world and with variety areas of specializations in economics taught me and helped me think in a broader way, which really enriched my research work in Shiga University. Whenever I faced any difficulty in regard with my study or my personal matter I discussed with my supervising professor and got the matters solved easily. I found all the professors in this university very much kind, helpful and cooperative minded. The faculty of economics of Shiga University is the biggest in Japan. As regards the scale of economics-faculty, there are very few universities in the world, which have economics-faculties, are as big as of Shiga University.

Outside campus there are many events and festivals all the year round. Apart from the study, students have every chance to take part in these events. I got myself involved in many activities and enjoyed my student life in Shiga University. Citizens of Hikone and residents around the campus keep in close touch with the students so that students have opportunity to share the pleasure with them.

I am really indebted to Shiga University. The memory I have developed, the knowledge I have achieved from this university will remain as a treasure in my life. I feel pride that I could become a student of this university.

私の滋賀大学での研究と生活

アヌパム・サハ (Bangladesh)
大学院経済学研究科二回生

研究生として滋賀大学に来てから三年近くが経ちました。私にとって初めての来日でした。関西空港に着いて指導教官を待っていた時、長身の方が笑顔で近づいて来られ落ち着いた声で「サハさんですか？」と声をかけて下さいました。私は興奮してその方を見ました。その方こそ私の指導教官でした。先生は研究がとても忙しいのに、空港へ迎えに来て下さったのです。先生の暖かい歓迎は私が日本の大学における指導教官のイメージを形成する一助となりました。

それが私の日本人と間近で接した初の体験で、日本についての第一印象となりました。先生に連れられ、外国人学生のために新しく建てられた宿舎である、滋賀大学国際交流会館に着きました。会館職員の方は休日にもかかわらず私を待っていて下さり、部屋のカギをくれました。彼女から受けた愛想の良い歓迎は、滋賀大学の先生と学生、学生と職員の間接の良好さを感じさせ、強く印象に残りました。

滋賀大学(経済学部)は緑や自然の美しさに恵まれた、歴史的に有名な彦根にあります。滋賀大学は日本一大きな湖である琵琶湖のまさに脇にあり、自然、緑、静寂を愛する者にとっては勉強、研究にうってつけの場所です。

滋賀大学にはほとんど全ての必要な施設があります。全ての必要な学術雑誌や書籍を見ることが出来ます。先生や職員はあらゆる種類の援助を下さり、大学生活を送りやすくしてくれまします。私は大学院経済学研究科に在学しています。経済学のいろいろな分野を専門とする、諸外国の有名な大学出身の先生方の指導により、広い視野で考えることができるようになり、私の研究も充実しています。研究や個人的な面で困難に直面した時は、指導教官に相談すれば容易に解決できます。滋賀大学の先生方は皆さんとても親切で協力的な方ばかりです。滋賀大学の経済学部は日本最大で、そのスケールは世界でもあまり類を見ません。

キャンパス外には、学生が勉強以外の活動として参加できる、多くの催しや祭が年間を通じてあります。私も多くの活動に参加し、学生生活を楽しんでいきます。彦根市民、大学周辺の住民は学生と親しく接してくれるので、学生は地域の皆さんとともに喜びを分かち合うことができます。

滋賀大学には本当に感謝しています。ここで私が作ることが出来た思い出、得た知識は、私の人生の宝として残ります。滋賀大学の学生になれたことを誇りに思っています。

(和訳文責 上村 健 学務課留学生係長)

ソフトテニス部（教育学部）

私たちソフトテニス部は、経済・教育学部の合同チームで試合に望みます。中学から続けている者や、中学または高校だけの経験者、そして大学からの初心者も皆一緒に練習しています。ポジションや各人の課題に沿った個別の練習もありますが、一緒に練習することの大切さは、試合等の経験豊富な者ほど重視しています。

テニスは、一般に個人競技の部類に入ると考えられ、実際にダブルスの試合は二人、シングルスでは一人で戦わなくてはなりません。また、精神面で大きく結果が左右されるスポーツでもあり、まして団体戦においては、そのプレッシャーは並大抵ではありません。ここで対戦チームも含め、それぞれ団結して仲間を応援するのです。各大学によってみな応援に特色がありますが、私たち滋賀大ソフトテニス部は心のこもった応援をし、それに応えるプレーヤーの集まりです。一緒に汗水流して練習した者同士のこころの通い合いがプレーヤーの力となるのです。

二〇〇二年度は変化の年でした。男子は春に七部降格。秋には七部優勝、入替戦で接戦の末、六部に返り咲くことができました。女子は、少ない部員数で四部を維持しています。部員の面では、両学部とも新入生が多く入部し、戦力も充実してきています。「うちはこれから強くなる」、幹部の一人としてそう感じています。試合に欠かせないチームとしてまとめ、普段の練習に始まり、合宿や各種行事を通じて育つものと思っています。

私たちは、大学生という貴重な時期に、大切な仲間と、今ある目標に向かって日々練習し励んでいこうと思っています。

浅間 良恒（教育学部三回生）



柔道部（経済学部）

我々柔道部は、十二名の部員で活動しています。柔道というのは、大変でつらそうなイメージがありますが、経済学部柔道部はそのような事を感じさせないものがあります。部員の大半は、大学から柔道を始めた初心者であることから、お互いに切磋琢磨し技術と意識を高め合いながらも、練習後はリラックスし、上下関係を抜きにして練習の反省等を話し合っています。

練習は、授業のある者は別ですが、原則、第四限の終わる四時から始め、約三時間練習をしています。また、月に二回程、土曜日に城戸師範に来て頂き、稽古を付けてもらい、我々の経験のないところを補ってもらっています。師範は、優しく丁寧に指導してくださるので、卒業するまでには初心者で入部した者でも黒帯をとるまでに実力を上げています。

毎年、京都大学、名古屋大学、和歌山大学、神戸商科大学、福井大学の五大学との定期戦に向けて日々練習を行っています。また、滋賀医科大学とも交流練習を行っており、この定期戦や交流練習は、一年でどれだけ強くなったかを確かめる機会であったり、単に練習相手を得るといったことばかりでなく、柔道を志す者同士の交流の場として重要なものとなっています。

また、我々柔道部は、柔道を学びたいという滋賀県立大学やミシガン州立大学連合センター（JCMU）の外国人留学生を練習生として受け入れています。とりわけJCMUの外国人留学生の受け入れは、人種や言葉の壁といったすべてを取り払った真の交流の場を提供していると感じています。

このような柔道部に少しでも興味がある方は、体育館下の柔剣道場に足を運んでみてください。部員一同歓迎いたします。

岡澤 和也（経済学部三回生）



ベルンハルト・シュリンク著
松永美穂訳

『逃げてゆく愛』

新潮社（二〇〇一年）

先ごろ、ドイツ国内では一本の映画が好評を博していました。その名も「グッバイ・レーニン」。タイトルからもうかがえるように、旧東ドイツを揶揄したコメディ作品です。

映画は、ドイツ統一前に昏睡に陥った母親が再び目を覚ますと、祖国東ドイツがなくなっているという設定。医者から、母親に二度と精神的ショックを与えないように注意されていた息子は、以前と何も変わらないかのように必死で取り繕います。が、窓から見えるコカ・コーラの巨大な広告、旧西ドイツ地域から引越してきた隣人との関係など、次から次へと騒動が起こって……『ドイチユラント』二〇〇三年八月九月号。

一見、他愛無いコメディ作品のようにですが、素直にコメディとして受け取れないところに、今日のドイツが抱える問題の根深さがあります。ベルリンの壁が崩壊してすでに十年以上経ちますが、今なおドイツの人々を隔てる「心の壁」は残されたままだからです。

さて、そのようなドイツが抱える複雑な事情を、何気ない普段の日常生活の視点から描いたのが本書『逃げてゆく愛』です。著者は、『朗読者』で一躍世界的に名を馳せたB・シュリンク。こちらは日本でもベストセラーとなりましたので、

ご存知の方も多いのではないのでしょうか。本書は七つの物語からなる著者初の短編集です。

ここには、妻をも密告する旧東ドイツ秘密警察の実態を描く「脱線」、一枚の絵からナチス時代の父親の秘密に迫る「少女とトカゲ」など、ドイツ固有の過去と向き合う作品の数々が収められています。テーマがテーマだけに気が滅入りそうになりますが、そこは人気作家（兼法律家！）。ときに日常のコミカルな風景や、最近の若者の風俗などを巧みに物語に織り込み、読者をあきさせません。また何より、一方の側を単に糾弾するだけでなく、彼らにさえ愛情を持つて接する描き方には、著者の人間性に対する深い信頼が感じられます。読む者を温かい気持ちにすらさせてくれます。

前作『朗読者』では、戦争犯罪の責任を問われたハンナが、裁判官に向かって静かに「あなただっただら何をしましたか？」と問いかける場面がありました。本作品でも、時代設定は様々ですが、こうした問いかけが物語の底流にあります。「過去の克服」とは何か。自らの問題として考えていきたいものです。

渡邊 暁彦（教育学部講師）



スタンレー・コレン著
石山鈴子訳

『左利きは危険がいっぱい』

文藝春秋（一九九四年）

人間の約九割は右利きであるということを知っていましたか。では、猫では右利きと左利きの割合が同程度であるということとは？日本のような車両左側通行の道では、左利きのドライバーよりも右利きのドライバーのほうが事故を起こしやすいというのはほんとうでしょうか。母親の出産年齢が高くなるにつれて、生まれる子供の利き手が左になる可能性が高まるということを知っていましたか。昔から左利きには天才や芸術家が多いと言われていたそうですが、これは事実でしょうか。

この本には、利き手についてのありとあらゆる話題が詰まっています。文化や宗教において右と左が持つ意味、右脳の働きと左脳の働きについて世間に行き渡っている「科学的な」噂（？）など、どれも興味深いものですが、中でも情熱を込めて語られるのが、人口の約一割を占めるという左手利きの人たちです。著者自身の研究の経過と成果を中心に、左手利きの人たちの特徴についてこれまでに得られてきた数多くの知見が（うーん？、と思つようなものもありますが）並べられています。

乏しい研究費をやりくりして研究を進めてきた、という事情のためか、研究方法もユニークです。紀元前三千年から現

代にいたるまでの絵画を調べ、そこに描かれた人物がどちらの手を使っているかを確かめることによって、それぞれの時代における左手利きの割合を推定したり、『ベースボール・エンサイクロペディア』に載っている二十人以上の野球選手の記事から、選手の手と寿命のデータを抜き出して両者の関係を調べたり、といった具合です。そのようにして検証されてきた仮説が、邦訳のタイトルである、『左利きは危険がいっぱい』ということになるわけです。

ところで、著者は、「左利きの人は目立たない」言い換えれば右利きの人は、周囲の誰かが左利きであってもそれに気づかないことが多いと述べていますが、実際にそうなのでしょうか。ちよつと自分の周囲のことを考えてみると、たしかに、左利きは自分の弟とその娘くらいしか思い当たりません。割合から言えば知人の十人に一人は左利きのはずなのですが……やはり、右利きの私は左利きの人に気づきにくいのでしょうか。

谷上 亜紀（経済学部助教授）



滋賀大学教育学部において、大学院教育学研究科修士を中心にした「第一回教育研究フォーラム」を、八月九日（土）に開催しました。

教育学研究科は、平成十五年三月に平成三年度設置の先発七専修が十一期生を、平成五年度設置の後発五専修が九期生を送り出してきました。修士生は、滋賀県下を中心に、学校教育、社会教育など教育界全般で活躍しています。

教育研究フォーラムは、教育学研究科の発足十周年を記念して、大学院支援プロジェクトが中心になり、大学と修士者が連携を深め、修士者を中心に、県下の教育界の教育実践に貢献できることを願って企画されました。

当日は、台風にもかかわらず、参加者は修了生等四〇人、大学院生三十五人、教官三十六名の一一一名と盛会でした。

第一回教育研究フォーラムの発表内容として、口頭報告二十四、要旨一、シンポジウム一の合計二十六の報告があり、六つの分科会（A現代の学校教育、B障害児教育、C教科指導・教材・授業／国語・社会、D同／理科・数学、E同／芸術・保健体育、F環境教育）に分かれて真剣な討論がかわされました。報告者は本研究科修士生二十一人、大学院生三人、他大学院修士生一人、その他一人でした。小学校・中学校・高等学校・養護学校の教育から看護専門学校、大学、海外日本人学校などの教育にまで及ぶ幅広い実践が報告され、また、学校のスクールカウンセラー

第1回 滋賀大学 教育研究フォーラム

の経験や、病院や社会福祉施設の音楽療法の指導、地域の郷土芸能（淡路人形浄瑠璃）の伝承運動など、報告者自身が活動されている場における興味ある実践が報告されました。各分科会のフロアーからも積極的な意見が寄せられ、有益な実践交流の場となりました。

最後の全体集会でのまとめでは、司会者による各分科会の内容の報告を行い、討論で引き続き大学と修士生との連携を強化していくこと、他大学出身者へも広く参加を呼びかけていくこと、県下の教育実践を発展させていく内容を考えていくことなどが提案されました。次回以降の課題として研究報告だけでなく、シンポジウムやワークショップなど、多様な参加が出来る交流や討論できる企画を考えてほしいと

のことや、会費を出してでも参加する研究交流の場づくりで、「滋賀大学教育実践学会」のようなものを要望する意見が出されました。今回、初めての企画にもかかわらず、案内を送ると同時に修了生の方々から報告したいとか、発表の内容に関する問い合わせが飛び込んできました。大学院発足十年間の歴史を刻むなかで、教育学研究科修士生が多様な教育現場で活躍されていることがわかると同時に、大学に戻って教育実践や研究の成果を報告し、互いに交流したいという希望があることがわかりました。今後も熱い思いに応える場作りをしていきたいと思えます。続いて、大学院発足十周年記念交流懇親会を生協食堂に移して開きました。参加者は四十八名で盛会のうち二時間の交流懇親会を終えました。

木全 清博（教育学部教授）



教育研究フォーラムの様子

近江の散歩

三井寺の裏山

大学に職を得て間もなく比叡山の中腹にある比叡平に住みついてから、およそ三十五年も経過した。そこは、三井寺の裏山の風致地区であったのだが、山林を切り開いて別荘地に仕立て上げられたところである。比叡山頂からは森の中に浮かんだ、異質な人工物として無惨な自然破壊の姿をさらけ出している。国定公園内にあるので、現在では開発することなどあり得ないところである。そんなところに我が家がある。この別荘地に紛れ込んだ貧乏人にとっては、山を歩いて降り降りせざるを得ないことが度々であったが、この小文を書くに当たって、山の変わり様に注目しながら散歩をすることにしたい。

高低差は約二五〇メートル、平均斜度は四〇度もあるうか、有名な活断層であるので相当きつい。大部分は檜の林の中にあるけもの道である。昔は雨が降っても地上にはなかなか雨が落ちてこないほど木が茂っていた。しかし、高圧

報道わがた主な記事(六月～八月)

六月

- * 滋賀大経済学部19日に講演会 博士課程新設記念 (京都(6・5)) 他
- * 淡水生涯カレッジ 県教委、受講者募る 大津会場と草津会場は滋賀大と連携 (京都(6・5))
- * 7、8日に『勝負市』彦根の花しょうぶ通り商店街 滋賀大の教員、学生も参加 (中日(6・5))
- * (研究してまず) 日本再生のカギ握る 個人尊重の組織とは 太田肇教授 (京都(6・10))
- * 七夕祭り浴衣で来てね 滋賀大で4日 学生が多彩な催し (京都(6・19))
- * 滋賀県産業プラザ 2002年度の研究成果を公表 産学官共同開発で滋賀大も取り組み (日経(6・19))
- * 最新技術紹介 道路公団がシンポ 滋賀大学生らも参加 (京都(6・22))
- * 3大学と県取り組み 弱者支援・家庭内暴力に解決策を国の地域貢献事業に選定 滋賀大、滋賀大他 (読売(6・24))
- * 障害のある子の放課後サポート 県内ネットワーク構築へ 29日に草津で準備会 結成総会 黒田学助教授 (京都(6・26))
- * カフェ・ラグーナ 学生に人気 上昇中 福利厚生施設を改修 経済学部 (中日(6・28)) 他
- * 産業共同研究センターでフォーラム開催 「コミュニケーション」と「マーケティング」テーマに (彦根タイムス(6・28))

七月

- * (研究してまず) 地元の食材を生かす 堀越昌子教授 「捨てない」発想大切に (京都(7・1))
- * (キャンパスは商店街 スーパーで大学院講義) 利便性生かし市民「集いの場」大津サテライトプラザ (産経(7・1タ))
- * 名大が入試要項 滋賀県立大も 滋賀大大学院も (中日(7・2))
- * 秋の日本環境会議知って 郷土料理試食や対談 滋賀・県立両大の8人 10日、プレイベント企画 (中日(7・4))
- * 高校生を対象に滋賀大が入試相談 1日と来月1日 (中日(7・6))
- * (近談) 気軽に相談してください コーディネーター 宇佐美照夫さん 大津サテライトプラザ (京都(7・5))
- * 来年度入試要項を発表 滋賀大 (朝日(7・8)) 他
- * 滋賀大がオープンキャンパス (日経(7・7タ))
- * 大学、時間も情報もない 国立大法人法成立へ 交付金や中期目標 空振り覚悟で準備 宮本憲一学長談 (日経(7・9タ))
- * 国民の期待に最善を尽くす 京滋の各大学が抱負 国立大法人法が成立 宮本憲一学長談 (京都(7・10))
- * ベトナムの留学生 彦根西高で「一日講師」 家庭科学科3年 民族衣装や調理実習題材 マイ・ソングク・ランさん (経済学部留学生) (中日(7・15))

- * 都市景観、フランスに学べ 建築士ら招き、今秋彦根で日仏会議 発起人 山崎一真教授 (滋賀彦根(7・16)) 他
- * 地元の淡水魚に焦点 滋賀大・堀越教授が料理紹介『湖魚と近江のくらし』出版 (中日(7・16))
- * 児童の被害 未然に防げ 大津署が防犯教室 附属小で (産経(7・18))
- * 「教育」大学の発明もつと生かさそう 大阪TLO 産・官・学一体で推進 総括コーディネーター 吉田慶志 産業共同研究センター 客員教授 (産経(7・27))
- * 税理士など資格取得セミナー 31日、滋賀大 産業共同研究センター (毎日(7・30))

八月

- * わらの家 断熱・防音 見直し機運 環境にも配慮 中野桂助教授宅も紹介 (日経(8・4タ))
- * 7小中学校に滋賀大生派遣 2学期から放課後学習補助 文科省事業 (中日(8・7))
- * 9日フォーラム 修了者ら研究活動報告 滋賀大大学院教育学研究科 (産経(8・8))
- * 昭和、平成の80冊を展示 社会科教科書は世相を語る 滋賀大教育学部図書館 (京都(8・9))
- * 滋賀大入試要項発表 (京都(8・15))
- * 大学生がロックフェス開催 30、31日 県立大で 滋賀大軽音楽部も参加 (京都(8・16))

鉄塔の維持管理をするために鉄塔の廻りで、ほんの少しの伐採が始まると、それまで寄せ合って支え合っていた木々が倒れ始め、破壊が始まり、ついには地盤がゆるんで土砂崩れに至った。今ではその部分より下の木が切り払われ、登り口には立派なコンクリートの壁が造られた。また、団地には最初から下水道は整っていたのであるが、建設省の基準に合わないのが、完全に作り直され、私の散歩道を通って山の下まで下水管が敷設された。下水道整備地区が増えたことにはなるのだが、住民にとって昔から少しも変わっていない。無駄な投資の一例である。

私の見る限り、山の手入れは全くないので、細いひ弱な木々は枯れてゆく。いろいろの理由で、私の散歩道は大変明るくなった。しかし、心は暗くなるばかりである。

村本 孝夫 (教育学部教授)





編集発行：滋賀大学広報委員会

委員長 住岡 英毅（副学長）
小栗 誠治（副学長）
遠藤 修一（教育学部）
久保 加織（教育学部）
太田 肇（経済学部）
加藤 竜太（経済学部）
片山 敏雄（総務課）
中村 豊市（学生生活課）
（印は本号のチーフ）

〒522-8522

彦根市馬場一丁目1 - 1

（Tel：0749-27-1172）

発行日：平成15年11月

E-mail：koho@biwako.shiga-u.ac.jp

ホームページ：http://www.shiga-u.ac.jp